

清水寺本堂下層から出土した土器について

林 健 亮

1. はじめに

清水寺は安来市清水町の清水山（標高176.5m）山中にある天台宗の古刹である。仏像を始め多くの寺宝を伝えるが、古い文書類は多くは残されておらず、古代の様相は明確ではない。『重要文化財 清水寺本堂保存修理工事報告書』⁽¹⁾（以下、『修理報告』と呼ぶ。）には、その冒頭で寺伝を記しており、概要は以下のとおりである。

用明天皇二（587）年尊隆上人が山中に瑞光を発見し、十一面観音の化身に出会ったことから草庵を結び十一面観音を祀ったところ、傍らから清水が湧き出したので清水寺と名付けた。推古天皇五（597）年に本堂を構えて勅願寺となったが、後年に堂舎は荒廃した。大同元（806）年に盛縁上人が平城天皇の勅詔をうけて堂舎を再建したとする。また、承和十四（847）年に慈覚大師が唐からの帰路に立ち寄り、これを機に天台宗となったと伝えられる。永禄・天正頃には戦火に巻き込まれ、本堂を除くほとんどの堂塔が消失。後に毛利氏や歴代松江藩主の庇護を受け復興したとされる。

『雲陽誌』⁽²⁾には、同様の寺伝に続いて、本堂の建立を大同元年と記す。一方、18世紀半ばの成立と推定される『出雲鋏』⁽³⁾には、教昊僧都が建て、大同元年に十二間四面を建立し後に清水を号する、とあって、清水寺を『出雲国風土記』記載の教昊寺と推定している。

『修理報告』によると、現存する本堂の建立年代は、解体調査の際に発見された、斗拱に記された「明德四年」の墨書から、明德四（1393）年であることが事実となっている。現在の寺域はこの頃に定まったと考えられるが、戦国時代の兵火により本堂以外の多くの建物が焼失したと考えられている。昭

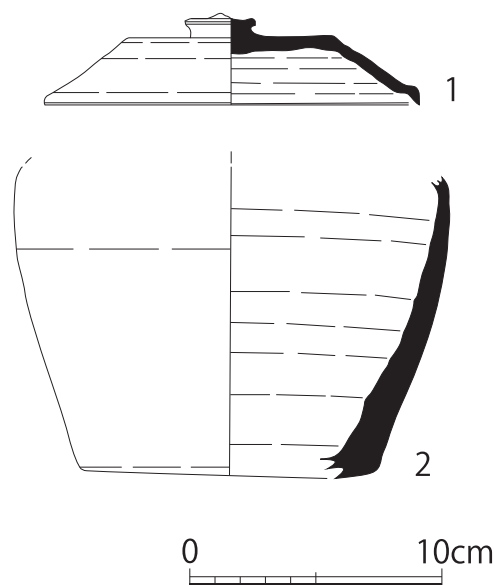
和47年には杉井坊の跡地に宝物館が建てられ、前の本尊であった十一面観世音菩薩立像を始めとする多くの仏像が納められたほか、「応永二十（1413）年四月十三日」の紀年銘を持つ金銅製十一面観音懸仏や、近年になって再発見された摩多羅神像など多くの寺宝が伝えられている。一方、古い文献がほとんど残されていないのは、戦国期の兵火によって焼失したのか。

昭和62年から始まった本堂の修理事業は、当初は半解体修理にとどめる計画だったようだが、柱礎石の破損が予想以上に甚大だったことから全解体修理が行われることになった。このため、平成元～2年に安来市教育委員会によって、平均40cmとされる柱礎石及び縁束石の据え直しを行う深さまでのすき取りと、トレンチによる部分的な発掘調査が実施⁽⁴⁾された。発掘調査では、数度に及ぶ建て替えの痕跡が明らかになっている。

2. 平成元～2年の発掘調査

清水寺本堂は清水山の中腹、標高96.5m付近に平坦面を造成して建てられており、本堂の保存修理に伴う発掘調査によって、明德四年に整備された現地盤面の下層に4面の遺構面が残っている事が確認された。

この内、最下層に当たる第4確認面の遺構は、トレンチの土層の観察から掘立柱建物とされ、その柱穴は60cm以上の掘方と記されている。また、柱が腐食してできた空洞の形状から、直径20cmで、8面に面取りを施された柱だったらしい。一方、出土遺物は焼土面から出土し、建物の廃絶に伴うとされる。第4確認面より下層には人為的な加工が確認できないことから、第4確認面が清水寺本堂付近での最古の



第1図 清水寺下層第4確認面出土須恵器実測図
(1:3) 註1報告書よりトレース

面と推定される。ただし、第4確認面の建物跡などに関する状況については、『修理報告』に明確な図面・写真が掲載されておらず、文章による説明のみとなっている。

『修理報告』には、第4確認面の焼土面から出土したとされる須恵器2点の実測図・写真が掲載されている。出土した須恵器は、いずれも第4トレンチと呼ばれる本堂中心からやや南よりの位置に設定されたトレンチで出土した。

第1図は、『修理報告』に掲載された須恵器2点の挿図をトレースしたものである。1-1は須恵器蓋である。宝珠状のつまみを持ち、頂部には回転糸切り痕を残している。1-2は壺体部下半の破片。外面は回転ナデ調整され、内面側は水引痕が明瞭と書かれている。底面に切り離し痕を残していないらしい。

『修理報告』では、1-1須恵器蓋について平安時代初め頃と推定している。出雲国府跡の総括報告書⁽⁵⁾の分類によれば第5形式に含まれる器形と思われる、出雲国府跡では8世紀末から9世紀前葉と考えられている。1-2須恵器壺については、時期を推定する根拠を持ち得ないが、高台の無い平底で、切り離し痕を残さないと言った特徴があり、平安期か。

3. 安来市教育委員会に保管されている資料

安来市教育委員会には、平成元～2年の発掘調査で出土した資料がコンテナ7箱程度に入れられて保管されている。安来市教育委員会の協力を得て資料を実見させていただいたが、保管されている資料中には『修理報告』に掲載されている資料は含まれていなかった。

安来市教育委員会が収蔵している資料は、ビニール袋に破片が入れられ、コンテナに詰め込まれた状態。多くは土師器や陶磁器類の細片で、古銭や金属器、木製品も含まれている。この内、須恵器・土師器を中心に14点の実測を行った。

2-1～5は須恵器。2-1は坏と思われるが細片のため詳細は不明。内外面共にナデ調整される。注記には「本堂No.4トレンチ」とあり、1-1・2須恵器が出土した『修理報告』第4トレンチか。2-2は壺の体部で肩付近か。外面に自然釉の付着がある。2-3～5は甕の体部。外面に平行タキが残る。内面は同心円文の押さえ具痕を残すが、2-5はナデ調整される。

2-6・8～9は土師器。2-6は高台の付く坏か。底部は回転糸切り痕を残す。断面三角形に見える小さな高台が付く。2-8・9は高台付きの坏。内外面共に回転ナデ調整。この内、2-6・8は「4トレンチ」の注記がある。

2-7は体部が緩やかに内湾する見かけない器種で蓋と判断した。内外面共に回転ナデ調整され、外面には強い回転ナデによる砂粒の移動によって沈線状の段が残る。非常に硬質で暗褐色を呈し、一見すると須恵器に見えるが、器面に泡立っているように見える部分があり、二次焼成によるものか。

2-10は硬質に焼成された無釉の壺の体部。外面には格子タキ。内面はナデ調整され、押さえ具痕を残さない。

2-11は瀬戸の壺と思われる。外面には明黄緑色の釉がかかり貫入が見られる。壺の肩部と思われ3～5条の沈線が入る。内面は横方向の丁寧なナデ。

2-12は備前の壺。暗赤褐色を呈し、外面には暗緑色の自然釉がかかる。

2-13は瓦質の火鉢。小片のため、口径は復元できなかった。沈線間に連続して菊花文のスタンプが押される。やや硬質なのは二次焼成によるものか。

2-14・15は土師器の坏か皿。いずれも底部に回転系切り痕を残す。

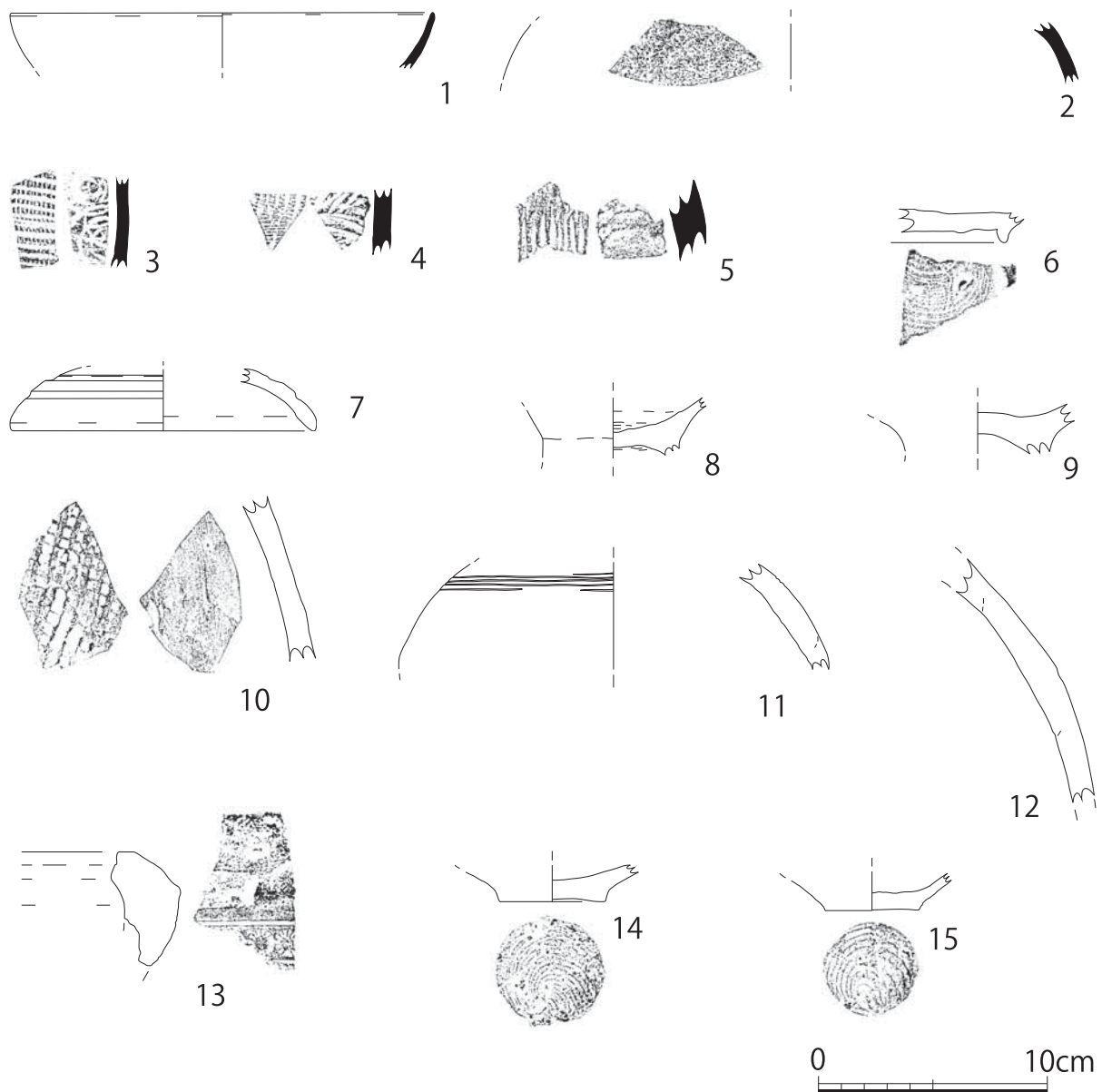
4. 清水寺本堂下層出土の土器の年代観

『修理報告』掲載資料を実見することはできなかった。

たが、1-1 蓋の形状は特徴的で、出雲国府跡第5形式に含まれる。また、細片ではあるが2-1・6も出雲国府跡第5形式に含まれる可能性がある。2-1・6は1-1・2と同じ第4トレンチからの出土と思われ、このトレンチで古い土器類が集中しているか。

2-8・9は出雲国府跡の第6～7形式に含まれ、平安期の土師器と考えられる。2-8には「4トレンチ」の注記がある。

ところで、2-7は灰褐色を呈し非常に硬質で、



第2図 清水寺本堂下層出土遺物実測図（1：3） 安来市教育委員会蔵



写真1 2-6 土師器坏底部



写真2 2-6 土師器坏内面



写真3 2-7 蓋外面



写真4 2-7 蓋内面



写真5 2-10 須恵器甕外面



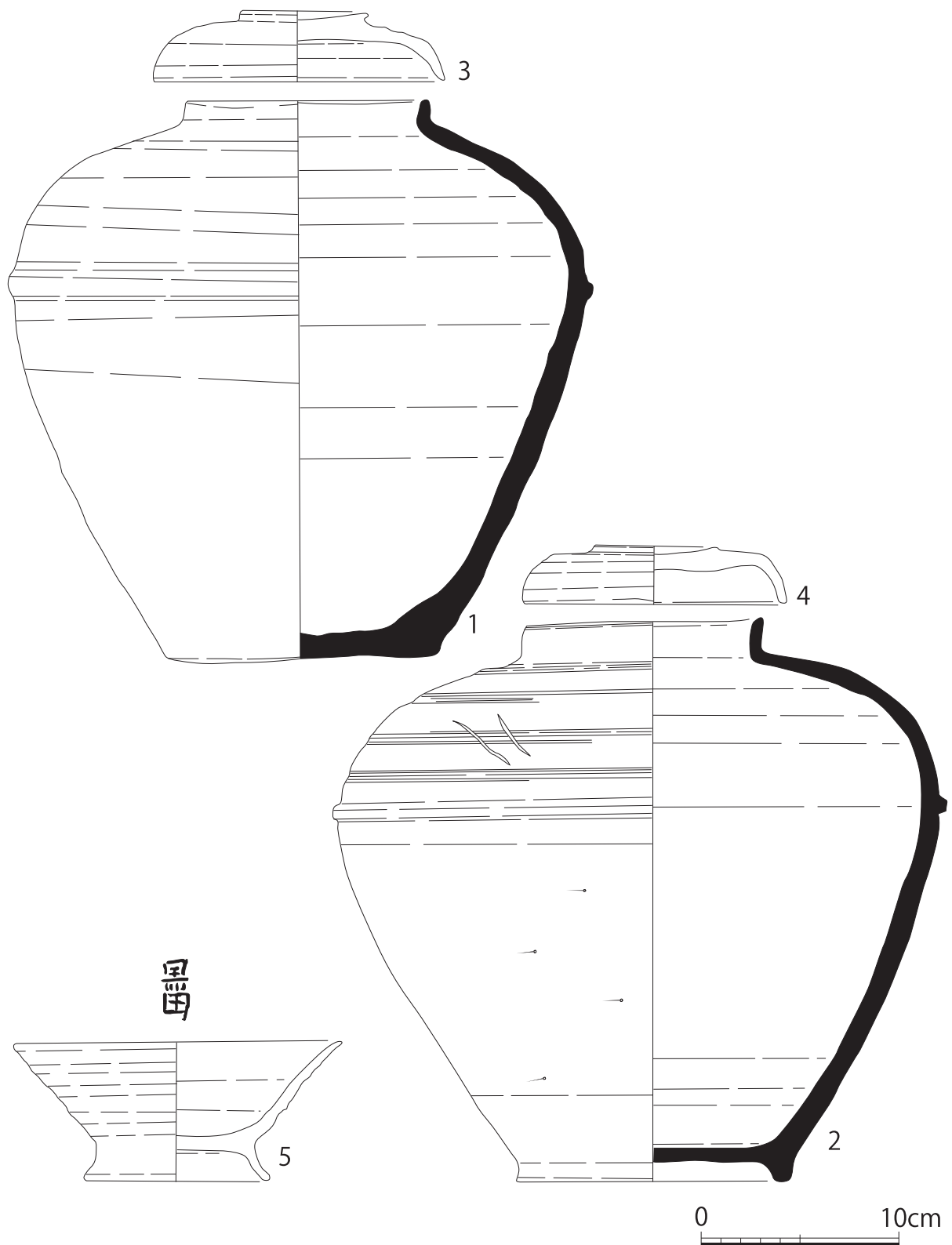
写真6 2-10 須恵器甕内面



写真7 2-11 瀬戸壺外面



写真8 2-14・15 土師器坏底部



第3図 馬場遺跡木棺墓出土遺物実測図（1：3） 註6報告書よりトレース

一見須恵器に見えるが、土師器の可能性を考えている。この土器に似た器種が、雲南市三刀屋町給下の馬場遺跡⁽⁶⁾にある(第3図)。馬場遺跡は真言宗峯寺の参道近くに位置する遺跡で、遺跡名となった字は、峯寺馬場に関わるものであろう。馬場遺跡からは10世紀頃とされる木棺墓が発見されており、木棺墓からは装飾大刀、水晶製などの平玉・丸玉をはじめ、「黒田」とヘラ書きされた土師器高台付き坏など多数の遺物が出土している。問題の土師器蓋は、被葬者の頭位近くに置かれたと思われる須恵器の壺2点のそれぞれに組み合う蓋(3-3・4)である。つまみにあたる円盤高台状の部分を、回転糸切りの切りっぱなしで調整しない、浅い皿状を呈する器形となっている。身である須恵器壺が、暗灰褐色を呈し、須恵器らしく焼成されているのに対し、蓋は酸化炎焼成され、土師器となっている。『修理報告』に掲載されている1-2須恵器壺を実見できていないが、同様の壺だった可能性はないだろうか。

5. まとめにかえて

『修理報告』が、第4確認面から出土した土器を建物の廃絶期に伴うと明言している点は注意されるが、安来市教育委員会に保管されている資料にも1-1、2-1・6より確実に古い資料は見られず、これらの土器の示す年代が、清水寺本堂付近での活動の開始時期を示していると思われる。廃絶に伴うとする『修理報告』の判断を尊重すれば、建物が建てられた後、そう長い時間を経ずに焼亡したものか。『修理報告』に掲載された資料を観察することはできなかったが、安来市教育委員会に保管されている資料からも、清水寺本堂付近の活動の始まりを8世紀末から9世紀前葉頃と推定できる。一方、安来市教育委員会保管の遺物にも733年以前に確実にさかのぼる資料を見いだすことができないため、『出雲鑑』の言う教皇僧による創建をうかがわせるデータは、今のところない。

また、2-7蓋に似た器種が、飯石郡の峯寺の参道近くから出土している点は興味深い。馬場遺跡の木棺墓は近隣に類例のない特別丁寧な造られた墓。

出土したヘラ書き土器にみえる「黒田」は、出雲国府に近い意宇郡中枢の地名にも見え、『出雲国風土記』に黒田駅・黒田村の名を残している。意宇郡の清水寺や黒田と飯石郡の峯寺に、何らかの関係があったのだろうか。ところで、馬場遺跡の木棺墓は10世紀頃と考えられているが、この年代は、清水寺の前の本尊の十一面観音菩薩立像の造像⁽⁷⁾時期に近い可能性がある。第4確認面の建物の焼亡後の状況についても、現存する仏像などとの関係も検討していく必要があろう。

安来市教育委員会保管資料を中心に清水寺本堂下層から出土した土器を紹介してきたが、これらのデータから想像される様子は以下のとおりである。

清水寺本堂付近での活動は1-1須恵器蓋や2-1須恵器、2-6土師器などの存在から8世紀末～9世紀前葉に始まった可能性があり、この年代観は、『雲陽誌』が伝える本堂の建立とされる大同元(806)年に近い。この時の建物が『修理報告』に記される面取りされた柱を用いた掘立柱建物だったとすれば、山林寺院の中心的な建物だった可能性が高い。しかし、その建物は比較的短期間の内に焼亡している可能性がある。また10世紀頃と考えられる2-7蓋については、十一面観音菩薩立像の造像や飯石郡の峯寺との関わりも想像される。

以上は、小さな土器片から導かれる想像に過ぎないが、清水寺本堂の保存修理工事に伴う発掘調査は、県内では非常に少ない古代に遡る現存寺院の中心部の発掘調査例であり、山林寺院の出現や展開を検討していく上で極めて重要な資料と言えることから、再検討していく必要があろう。

註

- (1)『重要文化財 清水寺本堂保存修理工事報告書』重要文化財清水寺本堂保存修理委員会 1992年
- (2)『雲陽誌』雄山閣 1971年
- (3)小林准士「五、出雲鑑」『松江市史 史料編5 近世I』松江市史編集委員会 2011年
- (4)『修理報告』には「第五節 地下遺構調査」として、発掘調査報告が掲載されている。『重要文化財 清水寺本堂保存修理工事報告書』重要文化財清水寺本堂保存修理委員会 1992年

- (5)『出雲国府跡』9 島根県教育委員会 2013年
 (6)『馬場遺跡発掘調査報告書』島根県教育委員会 2001年
 (7)『特別展 島根の仏像－平安時代のほとけ・人・祈り－』島根県立古代出雲歴史博物館 2018年

資料の実見にあたり安来市教育委員会舟木聡氏にご協力いただきました。ありがとうございました。

表 清水寺本堂下層出土遺物観察表

No.	出土地点	種別	器種	外面調整	内面調整	特徴	法量	備考
2-1	本堂No.4トレンチH~6 143	須恵器	坏か蓋	ナデ	ナデ			小片
2-2	本堂29.11.23 B23 24黒色土層	須恵器	壺	ナデ	ナデ	外面に灰かぶり		小片
2-3	本堂N-24-23lnll165V面下	須恵器	甕	平行タタキ	同心円文押さえ具			小片
2-4	本堂N-24-23lnll165V面下	須恵器	甕	平行タタキ・カキメ	同心円文押さえ具			小片
2-5	本堂89.11.28B23・24黒色土層	須恵器	壺	平行タタキ	ナデ			小片
2-6	本堂90.2.2 110 4トレンチF139	土師器	高台付き坏か皿	回転糸切り	ナデ			底部のみ
2-7	89.7.12 118へ	土師器?	蓋	回転ナデ	回転ナデ	非常に硬質、2次焼成か?	口径(13.2cm)	2片、6
2-8	90.1.31 4トレンチ黒色土層	土師器	高台付き坏	回転ナデ	回転ナデ			小片
2-9	89.7.14 118へ	土師器	高台付き坏	回転ナデ	回転ナデ			小片
2-10	本堂F-19 2面焼土下	須恵器	壺	格子タタキ	ナデ、繊維状の擦痕			小片
2-11	89.10.27 113-15ノハ焼土層の上	瀬戸	壺	明黄緑色の釉(貫入)	横方向のナデ	3~5条の沈線		小片
2-12	本堂89.7.14 1137	備前焼	壺	自然釉	ナデ	暗緑色の自然釉		小片
2-13	本堂F-14○○面 粘土中	瓦質	火鉢	菊花文のスタンプ	ナデ	沈線間に連続スタンプ文		硬質、2次焼成か
2-14	89.7.14 118へ	土師器	皿	回転糸切り	ナデ		底径4.6cm	底部のみ
2-15	89.7.14 118へ	土師器	坏	回転糸切り	ナデ		底径4.2cm	底部のみ

